

日本語の文法

匹 田 剛

1. 文法とは何か。

まず最初に、ここで言う文法とは我々が小学校や中学校などで習った「国文法」とか「学校文法」と呼ばれているものを指すのではないということを指摘しておかなければなりません。我々は日常生活の中でごく自然に、当たり前にして自由に日本語を使ってコミュニケーションを行っています。そのために我々が既に頭の中に持っているものが文法なのです。例えば、以下の文は(この様なことを言わなければいけない場面が実際に身の回りにどれほどあるかは別にして)少なくとも日本語として正しい文であることは確かです。

(1) これは ペン です。

しかし、次のような文はどうでしょう。

(2) は これ です ペン。

この様な文が日本語としては全く認められないということは全ての日本語話者にとって当たり前のことであろうと思われまふ。ここで、(1)のようなものが日本語として認められ、(2)のようなものが日本語ではないということを我々に判断させているもの、それが文法なのです。言い替えれば、日本語の文法とは我々日本語話者の頭の中に既にあり、話したり聞いたり理解したりする際に自然に利用しているものなのです。ですから、学校の文法教育などでしばしば見られる活用表の暗記などは少なくともここで言う文法を学ぶためにはあまり大きな意味を持たないこととなります。なぜなら、それらは既に我々日本語話者の頭の中に入っているはずなのですから。

文法はこの様に既に我々の頭の中に存在しているということですが、それでは我々は何のために文法を学ばなければならないのでしょうか。我々のような日本語話者と違って、これから日本語を学ぼうとしている外国人にはこの様な文法が頭の中に存在していません。そのため、彼らに日本語を教えるためにはこの様な文法に関する知識を与えなければならないのです。もちろん、この与え方には様々な方法があり、必ずしも文法を学問的に「講義する」必要は無いでしょう。しかしながら、いずれにせよそのような知識は教師の頭の中にしっかりと意識的に整理されている必要があります。そしてそのためには通常の日本語話者であるだけでは不足なのです。というのも、我々の頭の中にある文法に関する知識はそれだけでは無意識のものに過ぎず直感的なものなのです。我々と同じ様な直感を持たない外国人に教育を行う場合、この様な無意識的・直感的な知識では不十分です。日本語教師は我々が通常無意識に操っている文法を意識的に説明できなければならないのです。そのためにわれわれは外国人に日本語を教える際、文法を学ばなければならないのです。

2. 「は」と「が」

それでは我々は文法をどのように学ばなければならないのでしょうか。日本語話者が日本語の文法を学ぶということは、我々が既に無意識のうちに知っている文法を意識の上に引きずり出すことなのです。すなわち、我々は日本語の文法を知っているとはいえ、それはあくまでも無意識

のものです。我々はその無意識の操作に目をむけ、具体的にどのようなことを行っているのかを見つめなければなりません。そしてその上で、それをきれいに整理し、体系化するのです。それが日本語話者にとっての日本語文法学習なのです。

ここではそのようにして「発見」された日本語の文法の全体像を描き出すことはしません。それはどうていこの様な限られた場所では不可能なことですし、また残念ながら現在最先端の研究者たちにとっても日本語の（そして全ての言語の）文法はその正確な全容を知るには不明な点があまりに多いからです。以下では日本語の文法学習の一例として、助詞「は」と「が」の用い方の違いを概説します。それを通じて母語の文法を発見し整理するということはこの様なことなのだということをおぼろげながらも理解していただければと思います。

まず第1に以下のような2つの文を見て下さい。

(3) 私は 学生です。

(4) 私が 学生です。

これらの文は主語「私」に付してある助詞が「は」であるか「が」であるかが異なりますが、それ以外の違いはありません。これら2つの文の違い、すなわち「は」と「が」の違いはどこにあるのでしょうか。

この問題を論じる前にまずそのために必要な1組の概念を紹介しておきます。それは「新情報」と「旧情報」と呼ばれるものです。まず、新情報とはある文あるいは発話によって聞き手にはじめて伝えられる情報のことで、それに対して旧情報とは既に聞き手が知っている情報のことです。例えば次の対話をご覧下さい。

(5) 「あなたはそこで何をしていますのですか？」

「私はここでテレビを見ているのです。」

ここで下線_____を付してある部分、すなわち「私はここで」の部分は相手が最初の話し手の質問の中に含まれていることですから既に「私」という人物が「ここ」と呼ばれる場所で何かをしていることは既にわかっていると考えられます。つまり、この部分は旧情報を表しているのです。それに対して下線~~~~で示している箇所、すなわち「テレビを見ているのです」は相手が質問している部分ですので当然相手は知らないことになり、この文によってはじめて相手にもたらされる情報を含んでいることになります。つまりこの部分は新情報を表していることになります。

この「新情報」と「旧情報」という1組の概念が明らかになったところで「は」と「が」の使い方の違いについて見ていきましょう。以下の例文における「は」と「が」がついている下線で示した箇所は新情報を表しているのか旧情報を表しているのかを考えて見て下さい。

(6) 昔々 おじいさんとおばあさんが いました。

(7) おじいさんは 山に芝刈に、おばあさんは 川に洗濯にきました。

まず例文(6)の「おじいさんとおばあさんが」は「が」が用いられていますが、この様な文は昔話の冒頭に見られる導入部ですのでおじいさんとおばあさんはいずれも読者にとってはじめて目にする新情報を表していると考えられます。それに対して例文(7)の「おじいさんは」と「おばあさんは」は上の文を受けて用いられる文ですので、いずれも読者が既に了解している事柄であり旧情報を表していると考えられます。次の会話はどうでしょうか。

(8) おい、あっちから 太郎と花子が やってくるぞ。

(9) あ、本当だ。二人は これからどこに行くのかな。

(10) 彼らは これからデパートにいっけ。

ここでも上述の例文と同様に、「が」が用いられている要素は新情報を、「は」が用いられている要素は旧情報を表していることがわかります。以上の様な例から、助詞「が」は新情報の要素に用いられ「は」は旧情報の要素に用いられることがわかります。

それでは次に以下のような例文をご覧ください。

- (11) 太郎は病気です。
- (12) 子供たちは外で遊んでいる。
- (13) 彼は私が殺した。
- (14) 靴はここで脱いで下さい。
- (15) 学校には昨日いってきました。

ここで明らかになることは、「は」という助詞は必ずしも主語のみにつくものではないということです。例えば、(11)と(12)は主語に「は」が用いられている例ですが、例文(13)及び(14)の「彼は」と「靴は」はどちらも目的語であると考えられます。また(15)の「学校には」では「は」の他に目的地を表す「に」という別の助詞が付いてさえいます。つまり、助詞「が」は原則として主語を表す助詞ですが、「は」はそれとは全く別のレベルの助詞であり、その要素が旧情報を表していることを示すものなのです。

また、「は」はさらに細かく分けると「主題」の「は」と「対照」の「は」とに分類されます。

- (16) 鯨は哺乳動物です。
- (17) 私は日本人ですが、彼女はロシア人です。

例文(16)のような場合はただ単に文の主題を示しているのみですので、この様な場合の「は」は「主題」の「は」と呼ばれます。それに対して(17)のような「は」は2つ以上のものを比較対照している場合のもので、このような「は」は「対照」の「は」と呼ばれます。

その一方で、「が」は「中立叙述」の「が」と「総記」の「が」とに分類されます。

- (18) 知ってる？ アエロフロートがまた墜落したってよ。
- (19) 私がルールブックだ。

例文(18)のような「が」は観察できる動作・一時的状態を中立的に述べたもので、このような「が」は「中立叙述」の「が」と呼ばれます。それに対して(19)のようなものは「今話題になっているものの中で～だけが」という含みがあり、この様な場合「が」は「総記」の「が」と呼ばれます。

ただし、この様な「は」と「が」の用法は、絶対的なものではありません。ある場合には「は」は「主題に」解釈し易いと考えられ、またある場合には「対照」に解釈され易いというあくまでも解釈し易さの傾向の問題なのです。この「解釈のしやすさ」の問題も含めて、「は」と「が」の用法には様々な細かい問題があります。興味のある方は以下のような文献に詳しく論じられていますので参照して下さい。

- 久野暲 (1973)「日本文法研究」大修館
寺村秀夫他編 (1987)「ケーススタディ日本文法」桜楓社

最後に日本語の文法に興味をお持ちの方に1冊本を紹介しておきます。

- 井上ひさし (1984)「私家版 日本語文法」新潮文庫

この本は作家井上ひさし氏が自分なりの日本語文法に関する考えを軽いタッチで綴ったものです。もちろん氏は作家であり専門的な言語学者ではありませんので、学問的に見れば稚拙な点や勘違い、思いこみなども見られることは事実です。ただ、日本語の文法について考えるきっかけ

としては秀逸な著作であると考えられます。寝転がって読める程度の軽妙で読み易い本ですので興味があればぜひご一読下さい。そして、この本を読んで「文法についてもう少し本格的に勉強をしてみたいな」ともしお考えになるようでしたら、書店の日本語、あるいは日本語学、言語学のコーナーなどに並んでいる本にあたってみたらいかがでしょうか。